



「きょうりゅうのせかい」
小学校（上市町）



「二モの世界」
小学校（上市町）



子供たちへの説明

富山県特別支援学校長会長

富山県立しらとり支援学校長

米原 孝志

近年、大人になった障害のある人の話を聞くことが多くなりました。そこで必ずと言っていいほど語られるのが学生の時の回顧録で、その中では、先生との楽しく充実した学びの体験が語られることもありますが、つらく苦しい思いをした体験が語られることもあります。そして、つらく苦しい体験の多くに共通して語られる背景は、学びの内容や方法、支援の手立てに自分が納得していなかったというエピソードです。

何を学ぶのか、何のために学ぶのか、どのように学ぶのか、その際、どのような支援を受けるのかを子供に説明すること、子供が納得することは、充実した学びや学校生活のためには、とても大切なことです。

私たちは、毎日の実践について、そのことを子供に説明できるでしょうか。そして、それは子供が納得できる説明となるでしょうか。説明の内容が、例えば学習内容を指導計画どおりにこなすためなど、大人の都合

になっているとしたら、子供に堂々と説明することはできないだろうし、子供もその説明に納得できないだろうと思います。特に自分の意見を発信することが難しい、障害がある子供・特別な支援を必要とする子供に対してはその思いを汲み取る必要もあります。

一方で、子供の成長や笑顔は、私たちが教員という仕事をしていく上でのエネルギーであり、達成感となってやりがいにつながっていくものです。子供が自ら学びに向かうことは、そのためにとても大切なことです。

そうすると、子供が納得できる説明をすることは、私たち自身のためでもあるのではないかと思います。子供と向き合った時、説明を心の中でつぶやいてみましょう。子供に向かって語りかけてみましょう。互いに納得できた時、子供の充実した学びや学校生活、そして私たちのやりがいにつながるはずです。

多様な子供の「やってみたい」を支える図画工作科の授業実践
～特別支援教育の視点を生かした関わりと環境の工夫～

黒部市の小学校

1 はじめに

本校の2学年児童は、図画工作科の活動に意欲的に取り組み、作品を見合って感想を伝え合うことや、グループで思いを交流することが得意である。一方で、自由に表現することに戸惑ったり、思いをうまく形にできずに諦めてしまったりする児童もいる。そこで本実践では、好きなことや楽しかったこと等を対話の中で引き出しながらイメージを膨らませ、「表現したい」「試してみたい」という意欲を高めることを大切にしたい。児童がつくりだす過程を通して達成感を味わい、自分の思いを主体的に表現しようとする前向きな気持ちを育てることをねらいとした通常の学級での図画工作科の授業実践を紹介する。

2 取組の実践

(1) 身体感覚を生かした学習活動の工夫

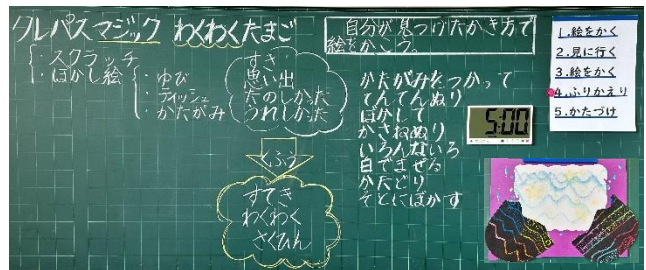
活動において、紙をちぎって貼る、指でクレヨンやパスをぼかすなど、身体感覚を活用する表現活動を取り入れた。これにより、手先の操作が苦手な児童も自分自身の感覚でアプローチして、学習への参加意欲を高めた。感触や視覚に訴える素材や技法を用いることで、表現することへの抵抗感を減らし、自己表現の幅を広げることができた。



【指でぼかしている様子】

(2) 安心して学べる環境づくりと見通しの提示

座席の配置に工夫を加え、自分のイメージをもつことが難しい児童も班の仲間の様子を見ながら自然と活動に取り組めるようにした。また、はさみの使い方や片付けの方法等、安全に関わる事項を明確に指導し、「授業で使わないものは机の中にしまう」環境を整えることによって、活動に集中できるようにした。加えて、児童が次に何をすべきかを見通しをもてるよう、指示は簡潔にし、学習の流れを板書で視覚的に示すなど工夫した。これらの取組により、どの児童も安心して活動することができた。



【学習の流れを視覚的に示した板書】

(3) 他者との関わりを通じた表現力・思考力の育成

活動の中盤には、クレヨンやパスをぼかした感じの違いや美しさに気付かせて、自分のイメージに描き足せるように、つくっている途中の作品を互いに鑑賞し合う時間を設けた。友達の作品について「どこがよいか」、自分の作品について「どのように表現したか」を言葉にする機会を設定したことで、自分の作品を振り返ったり、他者の視点から学んだりする姿が見られた。鑑賞のポイントを明示したことで、単なる感想の伝え合いではなく、具体的な工夫を聴き合うやり取りが生まれた。



【互いの作品を鑑賞し
工夫を伝え合う様子】

3 終わりに

本実践では、全ての児童が安心して学べる環境を整えることを大切にしたい。指示の工夫や道具の管理、児童が安心できる座席配置等、授業のユニバーサルデザインを意識した支援により、児童一人一人が自分の進め方で活動に取り組む姿が見られた。特に、対話と鑑賞を通してイメージを膨らませる中で「表現したい」「やってみたい」という気持ちが高まり、学習への意欲や集中力が伸びていった。今後も、特別支援教育の視点を生かしながら、児童が自分の思いをもって学び、安心して表現できる授業づくりを継続していきたい。

1 はじめに

本校の知的障害特別支援学級には、5年生が2名、6年生が3名在籍している。どの児童も表現を工夫して書くことは苦手だが、自分の思いを相手に伝えるなど、人と関わる活動は意欲的に取り組む。

異学年児童による学習活動をどのように展開していくかということは、日々の重要な課題である。そこで、異学年の類似した内容を取り上げ、児童の特性や強みを生かした指導過程を工夫することで教育効果を高めようと取り組んだ国語科の実践を紹介する。

2 取組の実際

(1) 類似した内容を扱った国語科の学習（「わたり」による指導）

児童が表現の工夫を考える場面では教師がそれぞれの学年に直接指導を行った。児童が俳句や短歌をつくる場面では、掲示物や工夫する視点を参考にしながら自分たちで考える間接指導とした。

本単元の3／4時の展開は、以下のとおりである。

5年		→ 教師のわたり		6年		→ 教師のわたり			
指導上の留意点（・指導 ◆評価 ★支援）		学習活動（配時）		学習形態		学習活動（配時）		指導上の留意点（・指導 ◆評価 ★支援）	
<p>★「間接指導」では、集めておいた言葉をボードに貼った掲示物を参考に俳句を考えることで、書く負担を軽減し、取り組みやすくする。</p> <p>・「直接指導」では、言葉の順序・語感・漢字やひらがなの文字の選択等の表現の工夫についてアドバイスし合うよう助言する。</p> <p>・書くことの楽しさや成就感を味わうことができるように、よいところを具体的に称賛する。</p>	1 課題を確認する。（7） 自分の感動を伝える俳句をつくり、表現を工夫しよう。		全体 ↓ 間接指導 ↓ 直接指導 ↓ 全体	1 課題を確認する。（7） 「たのしみ」がより伝わるように、表現を工夫して短歌をつくろう。		2 表現の工夫を考えて、共有し合う。 グループ（14） 3 自分の伝えたい「たのしみ」がより伝わるような表現を考えながら短歌をつくる。 個人（14） 4 自作の短歌を発表し、友達の作品にアドバイスしたり感想を伝えたりする。（10）	・「直接指導」では、たとえを使ったり言葉の順序を替えたりにするなどして、表現の工夫を考えて、共有し合う場をもつ。 ★表現の工夫として、教師がいくつかの工夫例を挙げておく。悩んだ場合にその中から選択できるように準備しておく。 ・「直接指導」で表現の工夫を考えた後に、個別に短歌をつくる活動順にすることで、「間接指導」でも明確な視点をもって短歌をつくることができるようにする。 ・書くことの楽しさや成就感を味わうことができるように、よいところを具体的に称賛する。		
	2 音数を整え、季語を入れて俳句をつくる。 個人（14）			2 表現の工夫を考えて、共有し合う。 グループ（14）					
	3 教科書の俳句を参考に表現を工夫する。 グループ（14）			3 自分の伝えたい「たのしみ」がより伝わるような表現を考えながら短歌をつくる。 個人（14）					
	4 自作の俳句を発表し、友達の作品にアドバイスしたり感想を伝えたりする。（10）			4 自作の短歌を発表し、友達の作品にアドバイスしたり感想を伝えたりする。（10）					
◆思考・判断・表現 表現の工夫を取り入れて俳句、短歌をつくっている。（発言、作品）									

(2) 児童の特性に応じた支援

① この単元の前に、5年生は宿泊学習を、6年生はプール清掃を体験した。豊かな自然と関わったり友達との共同活動を体験したりする中で、五感を通して達成感や充実感を味わった。そのときの様子や思いを、写真・作文・吹き出し・短冊等で表現し、右の写真のように教室に掲示した。自分の思いを伝えることに意欲的であるという強みを生かし、体験や感じたことを自由に書く活動を取り入れた。間接指導の際も、児童が写真・短冊等の掲示物を手がかりとして、創作意欲をかき立て、表現することを楽しみながら語彙を豊かにすることができた。

② 本時の終わりに全員で俳句や短歌を読み味わい、語感や言葉の使い方に着目しながら互いの表現の工夫を認め合う評価の場を設けた。自分の作品を発表し、仲間から認められることで、一人一人が表現することの楽しさを味わい、自信を深めることができた。



【写真・短冊等の掲示物】

3 終わりに

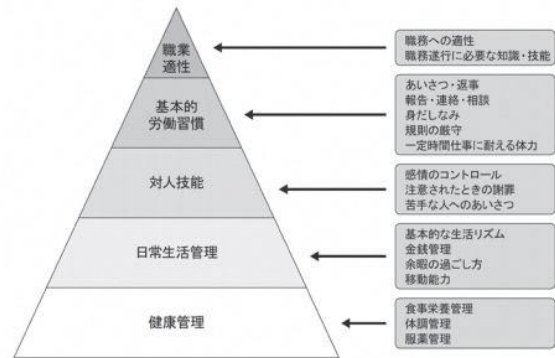
異学年の児童に類似した内容を扱うことで、作品づくりを通して、児童同士の様々な関わり合いが生まれた。また、学習の成果を異学年で発表し、互いに認め合うことで指導の効果を高めることができた。本実践のように、異学年の児童が共に学習を行う際は、児童の実態に沿って教師の支援の内容を吟味することが大切である。今後一人一人の特性に配慮しながら、より効果的な学習活動を模索していきたい。

高等学校における「通級による指導」の紹介 ～A 高等学校の取組から～

はじめに

本校の「通級による指導」では自立と社会参加に向け、就職や進学等の卒業後の一人一人の希望にかかわらず、毎回の授業展開は、数年後の働く社会人を想定し①～⑥の流れで行っている。

- ① 活動内容の把握
- ② 自分の目標記入（心の準備）
- ③ ストレッチやダンス（身体の準備）
- ④ 「本日の活動」
- ⑤ 片付け清掃
- ⑥ 自己評価の記入



【職業準備性ピラミッド（障害者職業センター）】

書くことで考えを言語化し、45分×2校時の授業全体から自分を客観視できるように組み立てている。また、『職業準備性ピラミッド』（右上図）を共通教材にし、安定した就労を継続するための主体的な自己管理・日常生活管理の理解に活用している。

「本日の活動」における共通活動について

“自分にいいところはない。わからない…” 受講希望時や授業最初での生徒の声である。できていないことにばかり目を向けず、生徒自身ができることに気付くようにしたいと願い、下記の3つの活動を通して個別の課題改善や肯定的自己概念を育てることを大切にしている。

- 「自己理解」では、KJQワークブック(※)を用い、やる気の原動力となる「こころの土台（安心感、楽しい経験、認められる経験、6つの社会生活技術）」を知る。他、学校行事毎の振り返りや休業計画立案を通して自分の考え方や行動の傾向を把握し、生活改善へつなげる。
- 「ワークトレーニング」では、30分程度の縫製活動をし、育てた花で染色した布を使って製作した小物を文化祭で販売したり、不要布で布巾をミシン縫いし、就業体験等でお世話になっている福祉事業所等に贈ったりする。ここでは社会人に求められる挨拶や返事、相談・連絡・報告や質問、お礼、謝罪等、場面に合った応対の他、安全・清潔衛生・正確丁寧・整理整頓等、就労に必要な作業態度等が繰り返し経験でき、自分の良さの発見やさらなる成長につながっている。
- 「生活力 up!」では家庭にある食材等を想定し簡単な調理（親子丼、炒飯等）をする。下ごしらえ～片付け清掃等、一連の活動が「家で、自分もできる!」という気付きになり、職業準備性ピラミッドの土台である日常生活等の自己管理を主体的に実行するきっかけとなっている。

個別の課題となる認知と行動、場面に合った言動、自己像の修正、自己開示、アサーション、ストレス対処、他者との距離感等は、機会をとらえ学習場面を設ける。様々な学習経験を通して生徒が自信を回復し、実行力を高めてほしいと願っている。安心できる環境で、自分の良さを実感し、うれしさ、達成感、役に立った感等を土台として働く社会人を実現してほしい。

受講生の進路状況

一般企業就職、障害者雇用での企業就労、就労移行支援事業所通所、専門学校（県外）進学

※「菅野純のKJQ調査」（実務教育出版）参照

高等学校の通級指導教室は、平成30年度に初めて開設され、現在は次の4校に設置されています。新川みどり野高校 雄峰高校 志貴野高校 となみ野高校

SDGs インクルーシブ教育システム推進事業

共生社会の実現に向けたインクルーシブ教育システムの理念に基づき、障害のある子供と障害のない子供が共に学び合えるようになるための環境の整備を目指しています。今年度の取組の一部を紹介します。

富山県／インクルーシブ教育システムの推進

インクルーシブ教育だより「インクルーシブの窓」は右記からダウンロードできます。
(R7.12月現在 82号まで発行)



1 第3回インクルーシブ教育推進フォーラム

11月25日(火)に、「すべての子供が共に学び、共に育つ学校、地域へ～共生社会の実現のために私たちができること～」をテーマに、第3回インクルーシブ教育推進フォーラムを開催しました。講師として、元ボッチャ日本代表選手でパラリンピックメダリストである藤井友里子氏をお招きしました。



【参加者と意見交換する藤井氏】

講演では、「私とボッチャの出会い～そして、これから～」と題し、当事者の視点から捉えた学校や職場、ボッチャとの出会い、そしてこれからの共生社会の実現に向けたヒントをいただきました。

講演後には、参加者（教職員、保護者、医療・福祉・企業・スポーツ・教育関係者、学生等）が意見交換・全体交流をしました。フォーラムの様子や参加者の感想は、上記のリンクまたは二次元コードから見るができます。

2 令和7年度小中学校等特別支援教育コーディネーターリーダー研修会

特別支援教育コーディネーターとしての経験が豊かなリーダー的なコーディネーターの資質向上を図り、将来的に地域の中核となって特別支援教育を牽引できる人材を育成することを目指し、昨年度に引き続き、小中学校等特別支援教育コーディネーターリーダー研修会を開催しました。

5月に開催された第1回の研修会では、新潟大学名誉教授の長澤正樹先生より「特別支援教育コーディネーターの役割 2025 コーディネーターとしてできること コンサルテーションを中心に」と題して、講演いただきました。講演では、特別支援教育コーディネーターの役割や立ち位置、保護者対応やコンサルテーションについて学びました。

また、インクルーシブ教育推進員が「特別支援教育コーディネーターのリーダーの皆さんへ」と題して、5月と11月の2回にわたり、講義を行いました。受講者は、教師の学びに向かう力やチームづくり（ファシリテーション）を土台として、それぞれの強み（右図の三層部分）を生かした特別支援教育コーディネーターを目指していくことについて考えました。



【講義資料より「？」に自分の強みを記入】

そして、受講者は、それぞれの勤務校や地域における実践を持ち寄り、市町村や校種の垣根を超えて協議や情報交換を行いました。



【それぞれの実践を発表し合う受講者】

3 インクルーシブ教育推進員より

先生方の実践から学んだこと

特別支援学級から通常の学級へ学びの場の変更を希望している多くの子供たちに出会いました。どの子供も、授業者の話や板書、友達の発言に注目したり、グループの友達に進んで関わったりするなど、安心して学んでいることがうかがえました。背景には、子供の安心感のために、授業や子供との関わりが「これでいいのか?」「どうすれば子供が学びやすくなるのか?」を真剣に考え続ける先生方の姿がありました。

子供たちが安心して過ごせる環境が整えば、一人ひとりの学びの意欲はさらに高まることでしょう。インクルーシブな学校教育は、全ての子供の中にある学びの意欲に応えようとする教職員のチーム力に支えられています。特別な実践ではなく、まずは目の前の子供たちをしっかりと見つめることが大切なのだと教えられました。

話は変わりますが、2006年に国連で採択（日本は2014年に批准）された「障害者の権利に関する条約」において、「合理的配慮」や「インクルーシブ教育システム」等の理念が提唱されました。

「合理的配慮」は、子供一人ひとりの教育的ニーズを踏まえ個別に決定されるものですが、一方で、合理的配慮の土台となる「基礎的環境整備」をしっかりと進めていこうと取り組んでいる学校が増えてきています。学級集団に目を向けた「教育のユニバーサルデザイン化」の考え方が生かされているのです。

そこには、「全ての子供は異なることが当たり前」「子供が困っていることをできるだけ少なくしよう」「誰一人取り残さないようにしたい」という先生方のインクルーシブな優しいまなざしがあるのです。

さて、教師に求められる資質・能力の一つとして、「ファシリテーション能力」が挙げられています。授業や教職員の会議等の話し合いにおいて、ファシリテーターがどのような問いかけや活動を提示すれば、その場が意味あるものになるかを考え、そのプロセスを大切にしていく営みです。ファシリテーションの基本の主なスキルとしては、①場のデザイン、②コミュニケーション、③構造化、④合意形成、が挙げられています。

全ての先生方が、このファシリテーションについて更なる学びを深め、子供たちや教職員同士の関わり合いを見つめる営みを続けていきたいと思います。ファシリテーションを支えるのは、人と人との対話です。多様性を認め、主に傾聴・承認・質問で関わり合うことを大切にしたいものです。



これからも一人ひとりの先生方が共生社会実現のためのよきモデルとなっていくことを願わずにはられません。

（インクルーシブ教育推進員 記）

※インクルーシブ教育推進員…学びの場の見直しに関する支援、インクルーシブ教育だより「インクルーシブの窓」による情報発信等を担当